

最適化数学

第1章 で学んだこと

1.1 曲線の方程式 $f(x,y)=0$

点 (x, y) における法線ベクトルは ∇f

曲線上の点 (x_0, y_0) における接線の式: $(\nabla f, \begin{pmatrix} x - x_0 \\ y - y_0 \end{pmatrix}) = 0$

曲面の方程式 $f(x,y,z)=0$

法線ベクトルも接線も、曲線の場合の自然な拡張

1.2 1次形式 (変数の1次の項だけからなる式) $f = a_1x_1 + \dots + a_nx_n = \sum_{i=1}^n a_ix_i$

$a = \begin{pmatrix} a_1 \\ \vdots \\ a_n \end{pmatrix}, x = \begin{pmatrix} x_1 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix}$ と表すと、 $f = (a, x)$ これから $\nabla f = \nabla(a, x) = a$

2次形式 (変数の2次の項だけからなる式)

$f = a_{11}x_1^2 + a_{22}x_2^2 + \dots + a_{nn}x_n^2 + 2(a_{12}x_1x_2 + a_{13}x_1x_3 + \dots + a_{(n-1)n}x_{n-1}x_n)$
 $= \sum_{i,j=1}^n a_{ij}x_ix_j$ (ただし $a_{ij} = a_{ji}$ とする)

$A = \begin{pmatrix} a_{11} & \dots & a_{1n} \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ a_{n1} & \dots & a_{nn} \end{pmatrix} \quad x = \begin{pmatrix} x_1 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix}$ と表すと (A は対称行列) $f = (x, Ax)$

この対称行列 A を f の係数行列とよぶ (したがって、2次形式の係数行列は対称行列)

$\nabla f = \nabla(x, Ax) = 2Ax$

双一次形式: $x_1 \dots x_n$ と $y_1 \dots y_n$ に対し1次の項のみからなる式

$f = a_{11}x_1y_1 + a_{12}x_1y_2 + \dots + a_{nn}x_ny_n = \sum_{i,j=1}^n a_{ij}x_iy_j$

$A = \begin{pmatrix} a_{11} & \dots & a_{1n} \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ a_{n1} & \dots & a_{nn} \end{pmatrix} \quad x = \begin{pmatrix} x_1 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix} \quad y = \begin{pmatrix} y_1 \\ \vdots \\ y_n \end{pmatrix}$ と表すと (A は対称行列とは限らない)

$f = (x, Ay)$ また $(x, A^T y) = (Ax, y)$ 書き換えると $(Ax, y) = (x, A^T y)$

ここで A^T は行列 A の転置行列

行列 A が対称行列 $\Leftrightarrow A^T = A$

公式: 任意の $n \times n$ 行列 A, B に対し $(AB)^T = B^T A^T$

任意の $n \times n$ 行列 A_1, \dots, A_n に対し $(A_1 \dots A_n)^T = A_n^T \dots A_1^T$

1.3

行列 A の固有ベクトル: に対し $Au = \lambda u$ が成り立つ 0 でないベクトル u

λ はその固有値

行列 A が $n \times n$ 対称行列のとき、 A は n 個の実数の固有値をもち、それに対応する固有ベ

クトル $u_1 \dots u_n$ は「要素がすべて実数で、互いに直交する単位ベクトル」にできる

正規直交系 $\{u_1 \dots u_n\} \Leftrightarrow (u_i, u_j) = \delta_{ij}$ (δ はクロネッカのデルタ)

固有方程式(特性方程式) $|\lambda I - A| = 0$

(グラム・)シュミットの直交化 : 線形独立なベクトル列 $\mathbf{u}_1 \cdots \mathbf{u}_n$ から、その線形結合により組織的に直交系を作り出す方法

直交行列: 正規直交系を列とする行列

典型例: 固有ベクトルから得られる正規直交系 $\mathbf{u}_1 \cdots \mathbf{u}_n$ を用いた行列 $U = (\mathbf{u}_1 \cdots \mathbf{u}_n)$

U が直交行列 $\Leftrightarrow U^T U = I$ すなわち $U^{-1} = U^T$ (U^{-1} は U の逆行列)

行列 A から直交行列 U が得られ対応する固有値を $\lambda_1 \dots \lambda_n$ とすると

$$A \text{ の対角化: } U^T A U = \begin{pmatrix} \lambda_1 & & \\ & \lambda_2 & \\ & & \ddots \\ & & & \lambda_n \end{pmatrix}$$

$$A \text{ のスペクトル分解(固有値分解) } A = U \begin{pmatrix} \lambda_1 & & \\ & \lambda_2 & \\ & & \ddots \\ & & & \lambda_n \end{pmatrix} U^T$$

2 次形式の標準形

2 次形式の係数行列は対称行列

係数行列 A によって $f = (\mathbf{x}, A\mathbf{x})$ と表される

A から得られる直交行列 $U = \{ u_{ij} \}$ により $\mathbf{x}' = U^T \mathbf{x}$ という変換を考える

$U^{-1} = U^T$ なので $\mathbf{x} = U \mathbf{x}'$ が成り立つ

$$\begin{aligned} \text{標準形: } (\mathbf{x}, A\mathbf{x}) &= (U\mathbf{x}', AU\mathbf{x}') = (\mathbf{x}', U^T A U \mathbf{x}') = (\mathbf{x}', \begin{pmatrix} \lambda_1 & & \\ & \lambda_2 & \\ & & \ddots \\ & & & \lambda_n \end{pmatrix} \mathbf{x}') \\ &= \lambda_1 x_1'^2 + \lambda_2 x_2'^2 + \cdots + \lambda_n x_n'^2 \end{aligned}$$

ランク(階数): 行列の0でない固有値の個数

$n \times n$ 対称行列が正則行列 \Leftrightarrow どの固有値も 0 でない、つまりランクが n

正則行列ならば逆行列が存在

正值(または正定値)対称行列: どの固有値も正の対称行列

A が正值対称行列 \Leftrightarrow 任意の $\mathbf{0}$ でないベクトル \mathbf{x} に対し $(\mathbf{x}, A\mathbf{x}) > 0$

A が半正值対称行列 \Leftrightarrow 任意のベクトル \mathbf{x} に対し $(\mathbf{x}, A\mathbf{x}) \geq 0$

負値(または負定値)対称行列: どの固有値も負の対称行列

正值 2 次形式: 正值対称行列を係数とする 2 次形式

半正值 2 次形式: 半正值対称行列を係数とする 2 次形式

定理 1.12 : A が半正值対称行列のとき、2 次形式 $(\mathbf{x}, A\mathbf{x})$ を最大/最小にする単位ベクトル \mathbf{x} は A の最大/最小固有値に対する固有ベクトル、また最大/最小値は A の最大/最小固有値に等しい